

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	26 / 2009 / 44-46
タイトル	「新青森市史」自然部会 -別編4自然- の執筆編集に携わって
著 者 名	小山内孝

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

「新青森市史」自然部会 一別編4自然― の執筆編集に携わって

顧問 小山内 孝

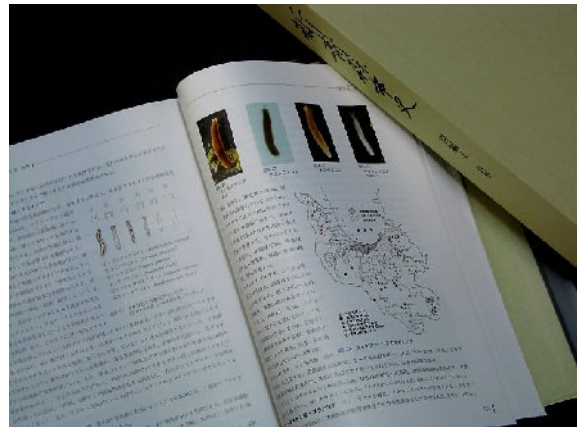
はじめに

青森市が、明治31年4月1日に誕生し、市制100年を記念して「新青森市史」を編さんすることになり、平成8年10月に編さん委員会がスタートしました。平成21年度まで、14年間で「新青森市史」18巻を完成するという大事業として始まりました。

その中の別編として「自然編」を編集することになり永井敏彦氏(元戸山高校校長)が自然部会長となり、「自然」の編さんの分野概要をまとめました。内容は先ず生命のないもの地形・地質分野、応用地質分野及び気象・気候分野(無生物)、

生命のあるもの(生物)と分け、総合的に記述するとし、学術的であっても一般市民に親しみやすく、記述はできるだけ平易にすることになりました。更に、生物の分野も植物分野と動物分野に分けられました。スタートの時、執筆編集員はわずか13名でした。これではとても自然分野を描くスタッフが少なすぎるということで、部会長の奮闘で執筆編集委員を増やして、執筆編集協力員、調査協力員、作業補助者など計46名になり、多くの方々の協力により、刊行するまでにいたったものです。特記したいのは、やぶなべ会や青森高校のかつての生物部の方々の協力なしには、動物分野はもっと貧しいものになっていたことでしょう。

平成9年頃から調査研究活動がはじまり、はじめは市当局も意欲的に援助体制がとられました。



[写真1] 新青森市史(別冊4、自然)

<動物分野を担当して考えたこと>

1. やがて動物の自然史を描く時代へ

はじめに、執筆編集員を引き受けたときは、私の分野は、分担の水生動物中心に、市のどんな地域にどんな動物が生息しているのかを明らかにすればよいのだと簡単に考えていたのです。ただ、原始的な海綿動物、腔腸動物やコケムシ動物など多くの原始的な水生動物も調べたいとも考えました。しかし、よく考えてみると「市史」とは「生物の青森市の自然史」を描くことが本質的なことだと気が付いて愕然としました。自然史というのは地域動物相の形成史と地史との関係を追究するのが本旨なのだ気がつきましたが、どうしようもありません。でも、少し資料を探しましたが多くはなく、また自分には能力もなくなかなか書きようがないと思ったものです。けれども、青森県は、多くの動物種の北限や南限となっていることが明らかで、日本固有種も多く、動物相の由来と進化史を明らかにするには絶好な地域であることは間違いありません。

2. グダリ沼のプラナリアと日本動物相の来歴

グダリ沼には現在5種類のプラナリアが生息しています。淡水生プラナリアは、約1cmほどの扁形動物です。冷水性で清冽に近い水環境の中でしか生息できません。青森高校の生物部は10年近く調査してきたのです。この調査によるとグダリ沼には7種のプラナリアが生息していたとされています。その中で、キタシロカズメウズムシは更新世の比較的后期にサハリンから北海道へ、その後北海道全土に広がり、本州つまり本県にも至り、青森市のグダリ沼に分布して、ここが南限となっているのです。また、手代木渉もキタシロカズメウズムシは、ヴュルム氷期の直前に津軽海峡を通過したかもしれないと述べ、淡水生プラナリアのなかでは新参者でないかとも述べています(「プラナリアの形体分



[写真2] 左からイズミオウズムシ、カズメウズムシ、キタシロカズメウズムシ、ナミウズムシ

化」1998、共立出版p16)。

今後、グダリ沼のプラナリア、キタシロカズメウズムシの進化史や朝鮮半島本州へ南の方から移住してきたと思われるミヤマウズムシ、カズメウズムシ、などのDNA分析等により進化史が明らかになると思います。プラナリアは日本の動物相の来歴とその分布の多様性の解析に大きな示唆を与えるものと考えられ、同様に北方から来たキタシロウズムシも同じような経過をたどって来ているようです。詳しくは、新青森市史の「自然」p522以降を参照ください。

3. 標本を作ることの重要性

プラナリアの場合、グダリ沼の個体数の変化が大変激しいことが判明しました。沢山生息していたナミウズムシが姿を消したのです。よく調査してみると下流や田代平周辺には生息しているかも知れませんが。このことは標本を作っておくことの大事さ、生息数の多いときほどきちんと標本を作っておくことの大切さを思い知らされます。

青森市に生息する大型の淡水貝類の例のように、ドブガイとタガイ、オオタニシとマルタニシなどは、判然と分類できているようですが、中間型も沢山あります。また、青森市のタガイは他の地域のものより大型だと言われています。カワニナも殻頂が欠けているものが多いのですが、地域によっては殻頂が尖ったままのものもあります。

自然史研究には、標本は研究材料になるだけでなく、研究結果を保証する証拠にもなるものです。また、液浸標本のニホンザリガニのほとんどには、数ミリのヒルミズという環形動物が付着しています。このヒルミズがニホンザリガニの日本列島への侵入経路や分布を明らかにしてくれる可能性があります。(新青森市史 別編4 自然 p540を参照)

それぞれの地域によって動物は、生息環境(地形、地質、水質等)の異なることにより、形だけでなく、生殖時期なども異なっているようです。とにかく、きちんと標本を作っておくことがその種の研究に大きな役割を果たします。

植物も多分同様だと思います。今までどこにでも生息していたマルタニシも、旧青森市では、絶滅危惧種です。

標本を作することは、なかなか大変なことです。少し努力しさえすれば誰にでもできると思います。私も標本を作ることに関心を持って努力しようと思っています。

4. 自然史博物館の建設を

先述のように、自然の変化も、社会の変化も近年まことにはげしく変動しています。先日まで、ここにこの動物が生息していたはずという動物が姿を消してしまっていることがよくあります。自然史研究には標本が欠かせぬ役割をはたすこと自明のことです。先述したように、標本が研究の結果を保証するだけでなく、その生物の生存の証拠でもあります。環境問題が重視される現代にあつて、各研究機関、大学、地域研究者の所有する標本は、膨大な量に達していると思います。大量に蓄積されている標本の整理、保存と新しい標本の受け入れには、整理する人員と膨大な予算が必要です。日本の大学や研究機関では、その生物の研究者が退職などでいなくなると、標本がそのまま放置されている事例もあるということです。どこの大学や研究機関でも、標本を長期間整理し、保存する施設が必要です。また、展示や教育、普及活動も考えるなら現在の郷土館だけでなく大規模な自然史博物館が今ほど必要な時はないと思います。

5. 文化行政に意識が低い当局

最初は、本気でやろうという新市史編さんへの意欲が感じられたのですが竜頭蛇尾の感じです。市史編さん室が、当初青森市総合福祉センターに置かれ、臨時的でない資料や標本も整理できる所に移るのだと思っていたのです。ところが、市役所新城庁舎に移され、その後、棟方志功館のある松原2丁目の旧市民図書館内に移され、今は、'08年12月末に中央市民センターの北側にある「松原ポンプ場内」に移されたのです。移動の度ごとに資料や標本等に移さなければならない状況で、市史編さん室は大変な苦勞をしていたのです。事務局も、最初は、総務部総務課市史編さん室であったものが、その後、市民文化部生涯学習課市史編さん室へと変わりました。当然、この期間、課長も、事務長も、室長も変わりました。このような14年～16年の長く継続する「新青森市史」編さんという大事業では、深く事業の文化性の理解が必要です。人的配置は、仕事の内容を充分学ぶ期間が必要だと私は考えています。つぎつぎと事務長をはじめ、スタッフの配置転換をすべきものではないのに大変多の方々が変わりました。それぞれの事務長をはじめ、室長、主事さんは大変苦勞している様子でした。ご苦勞に深く感謝したいと思います。

また、記録にとどめて置かなければならないのは、「別編 自然」は、2巻の刊行予定で、1巻はビジュアル版、もう1巻は自然の通史を予定していたものでした。

それが、鳴海雄大さんが室長の平成15年に地方自治体の社会環境と経済情勢が激変したという理由で、一方的に1巻となってしまったものです。鳴海室長さんも大変苦勞なされたものです。したがって、大幅に原稿を減らさなければならないことになったのです。その後室長になられた工藤清泰さんの奮闘と資料をCDR-ROMに入れ込むアイデアにより、「別編4 自然」は刊行に至ったのです。

最後に市当局へお願いになるのですが、青森市の編さん事業終わりにあたっては、総合的な総括をしていただきたいことと、蒐集した資料や標本が散逸しないように、これを蒐集する機関を市に作っていただきたい。また、市民が閲覧できるアーカイブを是非作っていただきたいのが切なる願いです。三内丸山遺跡をかかえる青森市にとっては、アーカイブを作ることは必須だと思っています。